

団体名 公益財団法人 ひょうごコミュニティ財団
(中間支援 3.0『ひょうごモデル』推進コンソーシアム)

令和 6 年度孤独・孤立対策担い手育成支援事業交付金 事業実施報告書

【事業内容】

1. 事業実施の概要
1-1 背景 孤独・孤立問題が深刻化する中、市民同士が対等につながることの重要性が注目されている。こうした参加の機会を育むという点において、地域に根付いた比較的小規模な N P O や市民団体が重要な役割を果たしている。一方、小規模 N P O や市民団体の多くは経営資源の不足、特に人材の不足という課題を抱えており、本来その状況の打破の為支援を行う中間支援組織の多くも市民参加を促進する準備に乏しく、また、短期的な成果指標に着目する資金・評価制度等が足かせとなり、市民参加を促進に資する機運・資源に乏しい。また、中間支援組織が存在しない空白地域も数多く存在している。 1-2 目的と概要 上記状況を踏まえ、小規模 N P O の活動を参加促進や担い手拡大を軸に強化を図り、その支援を有効に実施できるよう中間支援組織をも強化する為に、以下 2 に示す事業を展開した。
2. 具体的な取組内容
2-1 実施体制 本事業では、兵庫県内 6 団体と茨城・岐阜・東京の各 1 団体の計 9 つの中間支援組織にて「中間支援 3.0『ひょうごモデル』推進コンソーシアム」を組成し、実施した。 2-2 具体的な取組内容 上記の目的を実現するために、本事業では下記の 4 施策を実施した。 ①「人」「参加」に焦点を当てた伴走支援 ②小規模 N P O における市民参加を高めるセミナー ③中間支援が存在しない空白地域における中間支援活動インキュベート ④上記 3 施策の推進状況の共有・改善・検証による共有知化および他地域への波及

3. 事業の目標に関する客観的な指標の達成状況及びその評価

3-1 伴走支援

- ・ 支援先となる3団体に対し、5.8回の伴走支援を実施。
- ・ 複数の中間支援団体のスタッフにてチームを構成し、更により多様なメンバーが参加する研究会でケース会議を行うという「重層的な伴走支援」を実施。
- ・ 成果としては、①自団体について叶える機会が確保された②新しい発見や気づき得るきっかけが提供された③言語化のきっかけが生まれた④組織化のきっかけが生まれた等が上げられる。

3-2 セミナー

- ・ セミナーの企画、運営準備、効果測定・検証の為に研究会7回の実施。
- ・ 市民参加の機運を高め、以下のゼミへの集客促進を目的として「参加のデザイン・フォーラム」を実施、73名の参加とYouTube169回視聴を得た。
- ・ 継続的学びと実践を深める為、全4回の参加のデザイン短期集中ゼミを実施、91名の参加を得て、以下の様々な学びがあったとの声があった。①「安心」「信頼」の重要性②遊びや柔軟性の大切さ③自分たちでも出来るということ④活動のヒントや今後の実践⑤他団体との繋がや協力の可能性

3-3 中間支援活動インキュベート

- ・ 支援対象とする地域に中間支援人材を発掘し、既存の中間支援機関との連携で支援機能の提供が図られること、更に対象地域の自治体への提言や協働も含め、支援機能が継続できる方法を提言していくことを視野に事業を展開。
- ・ 結果として、実施地域を西脇市に決定し、地元支援者を発掘し、その支援者との連携の上で、支援事業を企画・検討、更に試行実施を行なうことができた。更にそのインキュベートの成果を検証する中で、支援プロセスを整理した。

3-4 全体研究会

- ・ 上記3事業の進捗をコンソーシアム内で逐次共有し、全体を着実に推進するべく、期間中7回の研究会（内、1回は最終報告会）を実施した。
- ・ 3月12日に実施した最終報告会では77名の参加とYouTube視聴45名を全国規模で得て、言語化・共有知化されたノウハウを他地域へ波及させた。

3. 事業の目標に関する客観的な指標の達成状況及びその評価（続き）

3-5 全体のまとめ

・孤独・孤立対策に取り組む団体の近くにおいて、ソフトの支援に居り汲む中間支援組織及びその機能に光を当てた時、個別の事業を超えて全体の成果として以下が挙げられる。

- ① 3種の「ソフト面の中間支援事業」の必要性、有効性が見える化したこと
- ② それぞれにおいてのその手法・プロセスが見える化し、これらの事業の方向性や課題を整理
- ③ 連携・協働の重要性を明らかにした
- ④ 隣接領域（NPO支援と市域活動支援）の融合の重要性を明らかにした